

## 六、特別寄稿

### 長谷川如是閑の「新聞道徳論」

——正しい報道（ニュース）を確立するため——

田中 浩

はじめに

長谷川如是閑（一八七五—一九六九）は、明治・大正・昭和の三代にかけて、百年を生き抜いた大ジャーナリストである。

かれは、戦前においては、第一級の新聞人、雑誌編集者、文明批評家として、国家主義、軍国主義、ファシズムと勇敢に闘い、敗戦後は、日本最高の知識人として、戦後民主主義の発展・確立のために数々の有益な提言をおこなっている。ここでは、近代日本の生んだ百科全書学者長谷川如是閑の新聞論、ジャーナリズム観について簡単に紹介する。

## 一、新聞の本質——対立意識の表現

如是閑が新聞論を展開しはじめた時期（大正中期頃）の日本の新聞は、商業新聞と呼ばれ、いずれの新聞も「公正中立・不偏不党」をその編集方針としてかかっていた。この点については、戦後のこんにちにおいてもなんら変わるどころはない。これにたいし、如是閑は、「新聞とは対立意識の表現である」と述べる。こうしたかれの新聞の定義は、当然にその内容において新聞批判の意を含んでいたことはいうまでもない。

かれによれば、現代社会は、さまざまな対立群から、たとえば、生産者、分配者、消費者などの異種群から成り立っている社会である。そのことは、社会において、異なった対立関係に立つ対立群各々の生活事実の意識と、三者すべてを含めた関係の生活事実の意識とを生ぜしめるが、それを如是閑は「社会意識」と呼ぶ<sup>(1)</sup>。そして、新聞は、もともと、こうした対立群のもつ社会意識を表明するものとして発生した、という。したがって、原始社会のような統一群から成る共同体的組織においては、生活事実の意識形態はほぼ同一のものであるから新聞の発生する動機はないが、それでも、対立意識の表現としての新聞的現象がまっただけではない、と如是閑は述べ、その例として、たとえば、エスキモー「最近ではイヌイットという言葉が用いられている」社会でも、意見の対立が現れると、係争事件について、対立群がその賛否について相互に唱え合い、唱え負かした方が勝ち、とする意識表明のしくみをあげている。

次いで如是閑は、国家とくに近代国家が発生すると、国家はそもそも異種群の対立関係を基礎とする組織であるから、印刷術の急速な発達も手伝って、ここに多数の新聞紙が発生した、という。そのさい、新聞は、一つには、ある同心群の人びとに、かれら自身の生活事実を明らかにせしめ、他の群の生活事実とは異なる特殊性を意識せしめるために、もう一つは、ある群が他の群の生活事実の歴史を知ることによって、他の群の存在を理解し、それとの接触関係

を進展せしめる役割をもつものとして発展したとし、とくに新聞紙は、主として後者の役割を果たすためのものであった、と如是閑は述べている。<sup>(2)</sup>

したがって、古代植民地の時代には、本国からの情報を知るために、近代国家においては、自己の群生活に直接触れていない異種群の生活事実の情報をえるために、または相互に交流している諸国家が隣国の情報を獲得すべく新聞を発行した<sup>(3)</sup>、と如是閑はいう。その例として、かれは、たとえばイギリスにおいては、ピューリタン革命期のクロムウェル時代に、国内的には、激しい党派対立を表明する多数の新聞が、また国際的には、商業・交易を推進するために『オランダよりのニュース』という新聞紙が発行されていた、という事実をあげている。

一方、日本では、明治維新前に外国人が、かれらの同心群の態度を日本人に知らせるために、また、当時、政治的弱者となっていた幕府方が弱者としての群の態度を言論によって発揚せしめ、開国の必要性を人びとに知らしめるために『バタヒア新聞』を発行し、さらには維新後においては、敗者となった旧幕臣系の人びと、たとえば福地源一郎（桜痴）、成島柳北などが明治初年に新政府攻撃の記事を書いた事実を指摘している。また、その後、日本の近代化をめぐっては、イギリス流の『郵便報知』、『読売』、『東京毎日』、『フランス流の『自由新聞』、『自由の灯』などの各新聞が発行され<sup>(4)</sup>、政府側もこれに対して『太政官日誌』を発行した<sup>(5)</sup>、と如是閑は述べている。如是閑によれば、対立意識の表明としての新聞が、本来の新聞の姿つまり新聞の本質である。では、なぜ新聞は、明治末年ごろまでに、その本来の性質を喪失したのか。

## 二、新聞の商品化——新聞紙の変質

新聞紙の商品化つまり新聞が対立意識の表明たることをやめ変質したのは、資本主義社会の発展に起因する、と如

是閑はいう。資本主義社会の精神と行動は、なによりもまず利潤獲得を命令とするから、新聞もまた頒布量によってその優劣が争われる。そのため、各対立群に読まれるような中立新聞あるいは商業新聞が登場した、と如是閑は述べ、新聞紙に新聞的機能以外の商品価値を付加し、いわゆる商品新聞、中立新聞を創始したのは、一八七九年（明一二）一月二五日に『朝日新聞』を発行した村山龍平であった、と指摘している。

このようにみると、日本においては、かなり早い時期から商業新聞的性格をもった新聞紙が発行されはじめていたことがわかるが、にもかかわらず、明治三〇年代ごろまでは、論説中心の、なんらかの政治的立場を表明した「大新聞」（『朝野』、『郵便報知』、『時事新報』、『日本』<sup>(6)</sup>、イギリスでは、『ロンドン・タイムズ』、『マンチェスター・ガーディアン』など）が主流を占めていたのである。<sup>(7)</sup>

これにたいし、江戸時代の『読売り』にみられるような俳句、川柳、小説や社会事象を面白おかしく盛り込んだ、漢字にはルビが付されている「小新聞」があった。ところで、先ほど「大新聞」は論説中心と述べたが、やはり新聞の売れ行き如何は新聞社の死命を制することになるから、各社とも「小新聞」の手法を採り入れて、尾崎紅葉、長谷川二葉亭、夏目漱石、島崎藤村、正岡子規などのいわゆる新聞小説家を招へいし、新聞の拡販に務めたが、これによって新聞文学が発展した。<sup>(8)</sup>

にもかかわらず、論説中心の「大新聞」は、明治三〇年代末ごろから急速にその売れ行きが減少し、「大新聞」と「小新聞」の性格をミックスしたような中間新聞がその勢いを伸ばしてくる。こうした状況を反映して、明治二〇年代の中ごろから三〇年代末にかけて、各新聞の代表的論説記者たち、たとえば、犬養毅、尾崎行雄、島田三郎、陸羯南、三宅雪嶺らが次々と新聞世界から身を退き、一九二九年（昭和四）には、ついに『国民新聞』の創立者徳富蘇峰が引退するが、この事件は、日本における「大新聞」の最後の刻を告げるものとして世間の注目を浴びた。<sup>(9)</sup>

以後、日本の商業新聞はますます独占化を強め、「厳正中立・不偏不党」を表看板にしながら、実は大衆の要求を無視して階級の本質を無遠慮に発揮する危険な道に向かって歩みはじめが、それに呼応するかのようになり、この時期において、如是閑は精力的にその新聞論を展開することになる。

### 三、新聞の社会的責任

昭和初年ごろまでに、いまや新聞界は、完全に商業新聞の支配するところとなっていた。この時点に立って、如是閑の新聞論の目ざすところは、新聞商品化の時代において、いかにすれば、新聞が正しい報道（ニュース）をするという新聞本来の性格をとりもどすことができるか、またそれによって、新聞を真に公論機関たらしめる方策は如何いかん、という課題を考究することにあつたことはいうまでもない。

ここでは如是閑は、新聞がその本来の機能を發揮し、その公共事業としての役割を果たしうるためには、新聞製作者全体とくに新聞記者の責任が重大であることを指摘している。

如是閑によれば、いかに新聞独占の時代、商品化の時代とはいえ、新聞があまりにもブルジョア階級に偏すると安全な商品とはなりえない<sup>(10)</sup>、なぜなら、新聞紙は商品であると同時に、それぞれの社会が共通に有する社会的意識いすなわち「大衆の社会的要求に應じる必要」を充足させる機能をもち、この機能に新聞紙は制約されるからである<sup>(12)</sup>。また、資本家たる新聞発行者たちは、新聞の発行部数を増大させるために読者の購買意欲をそそるような記事や資本主義の階級的独裁の機関となることを求めるが、先ほど述べたような新聞紙の機能に制約されて自家調節をせざるをえない<sup>(14)</sup>。このさい、そのような自家調節を行えるのは、新聞（ニュース）の通過する主観の持ち主たる新聞記者という非資本家たちである<sup>(15)</sup>、と如是閑はいう。

そして、明治二〇、三〇年代には、そういう社会的意志力をもった記者が多数いたし、また初期の新聞事業は手工業的だったので、新聞記者の社会的意識によって企業方針が決定されることもありえた<sup>(16)</sup>と述べながら、昭和初期の記者たちが、社会的意識を表明する意志力をすっかり失っていることを嘆いている。如是閑の一連の新聞論は、満州事変前夜の時期に書かれたものであり、かれがもつともマルクス主義に接近したころの産物であるが、かれの新聞論は、みごとにその後の新聞界の墮落を見通している。

敗戦直後の一九四六年（昭和二一）、『改造』四、五月号に、如是閑は、「新聞論」というタイトルの論説を二回にわたって連載している。この論説は、いわば、ジャーナリズムの戦争責任論を述べたものとして、きわめて興味深い内容を含んでいる。

如是閑は、戦前からのかれの持論、「新聞は対立意識の表現である」という立場から、新聞紙の発生・存在理由は、異なる国家的・社会的意識の対立を表現する点にあるとし、満州事変前後から一五年戦争の時期にかけて、わが国の新聞は、この新聞本来の機能を全く喪失してしまった、ときびしく弾効している。

- (一) 新聞は対立意識を表明することなく、国家的・社会的意識（全体主義的国家意識）を統一する機関となった。
- (二) 新聞は、国内と海外の事情とを正しく認識させる機関としての機能を失い、凸面鏡のようなゆがんだ姿を国民に伝え、そのため国民をして、自分の国についても世界の国々についても正しい認識と判断をもてなくした。
- (三) 新聞記事は、独裁政治を謳歌する臆病なラッパ手となり果てた。
- (四) 新聞は、国民的無知を表現し助長する機関となった。

そして、日本の新聞が各国においてほとんど例をみないような特徴をもつにいたったのは、日本社会が、それぞれの時代に必然にもつべきはずの文化性をじゅうぶんにもたなかったことに起因すると述べ、明治維新後も、伝統的な

「日本の専制」が持続され、それが昭和日本になって顕著な形をとって現れ、そのことが新聞にも反映されたのである、と指摘している。では、正しい新聞報道の在り方とはなにか。

#### 四、新聞道德論

如是閑が、「新聞論」を書いた一年半後の一九四八年（昭和二三）一月に、かれは、日本新聞協会第四回新聞講座の講演会で、「新聞道德論」という講演を行っている。この講演は、「新聞論」とともに、戦前の日本の新聞の在り方に反省を加えたるうえで、今後、日本の新聞はどうあるべきかを述べたものとして、かれの新聞論のなかで、きわめて重要な位置を占めるものといえよう。

如是閑によれば、新聞道德とは、新聞が立場を失わないことである。したがって、戦争中の新聞が全体主義に調子を合わせ、それに迎合した態度は新聞道德の喪失を意味する。

では、新聞がその立場を失わないようにするにはどうすればよいのか。ひとつは、新聞的英知をもつということ、それは対立的地位を自ら堅持し、対立するあらゆる勢力を正しく認識し、自己の立場を抑制する自覚性をもつこと、つまり相手を知ることが自己を抑制することであり、その立場に立って、自己と相手方を正しく表現せよ、ということだ、と如是閑はいう。

次にかれは、道德性だけでは不十分であって、新聞は科学的態度をもって、新聞において取りあげた事項が社会的にどういう意味をもっているかを読者に正しく判断させるようにせよ、と述べている。そして、そのような道德性と科学性を保障するものは、企業家、編集員、工場員の全員が新聞意識をもつことである、と述べ、大衆を馬鹿にするな、大衆の最後の判断こそがジャーナリズムの性格を決定する、として黄色新聞イエロー・ペーパーや赤新聞が栄えたためしのない

ことをその例としてあげている。かれはいう。新聞は、原告や被告の立場であって、正しい報道をすることがその任務で、制断は読者に任せよ、新聞人は大衆の正しい感覚を直観するセンスをもて、と。また如是閑は別の個所でも、ジャーナリストの任務は、大衆の指導者であってはならない、<sup>(17)</sup>しかるに、明治三〇年以降の日本の新聞は裁判官になつてしまつた、<sup>(18)</sup>として、新聞は公共の機関に徹すべきである、<sup>(19)</sup>と述べている。

しかし、健全な新聞道徳は、健全な文化・社会環境のもとでしか育成されえない。これについては、如是閑は、新聞製作の要諦として、イギリス市民の信条であるリバティー（自由）とコンプロマイズ（協調）の精神に学ぶべきである、として次のように述べている。

「コンプロマイズはリバティーを抑える力ではなく、それに協同性を与える力である。リバティーのない文明の歴史は東洋的の停頓に陥り、コンプロマイズを知らない文明の歴史はラテン的の混乱に走る。発展的のイギリス文明にある緊密さは、リバティーとコンプロマイズとの合理的な結びつきの賜物」<sup>(20)</sup>である、と。

そして、このリバティーとコンプロマイズ<sup>(21)</sup>の精神こそ、戦後五〇年近く経過したこんにちでも、われわれ日本人が、じゅうぶんに体得しえていない、もっとも基本的な市民社会の思想原理ではないのか。

如是閑はいう。「健全なる社会にのみ健全なるジャーナリズムは存在する。われわれは一国のジャーナリズムを観ることによって、その国の健康状態如何を知ることができる」<sup>(21)</sup>、と。この言葉は、いまからちょうど六〇年ほどまえの、日中戦争を数年後にひかえた時点で述べられたものであるが、現代においても、この言葉は、じゅうぶんに教訓的であらう。



注

- (1) 「新聞および新聞人」、『朝日新聞』、一九五四・一・二五〜二・二四（三一回連載）。同年四月、『新聞』というタイトルで朝日新聞社より出版。
- (2) (3) 「新聞紙の社会的動機とその没却」、『社会学雑誌』第四九号、一九二八年五月七日、二四ページ。
- (4) 「新聞論」（後篇）、『改造』第二七卷第五号、一九四六年五月一日、四二ページ。
- (5) 『新聞』（前出）、二六ページ。
- (6) 前掲書 一六ページ。
- (7) 「個性をもつ新聞を」、『五〇人の新聞人』、電通、一九五五年七月一日、三六ページ。
- (8) 「新聞文学」、『長谷川如是閑選集』第四卷所収、栗田出版会、一九七〇年三月五日、二二三ページ。
- (9) 「現代の新聞と新聞記者」、『改造』第一一巻第三号、一九二九年三月、七六ページ。
- (10) 「資本主義社会に於ける新聞紙の変質」、『我等』第一一巻第一号、一九二九年一月。
- (11) 「現代の新聞と新聞記者」、『改造』第一巻第三号、一九二九年三月。
- (12) 「資本主義社会に於ける新聞紙の変質」、『我等』第一一巻第一号、一九二九年一月。
- (13) 「新聞紙の社会的動機とその没却」、『社会学雑誌』第四九号、一九二八年五月七日。
- (14) 「社会意識の表現形態としての新聞」、『我等』第一一巻第六号、一九二九年六月一日。
- (15) 「資本主義社会に於ける新聞紙の変質」、『我等』第一一巻第一号、一九二九年一月。
- (16) 「現代新聞総評―日本の新聞紙の商品的超越性」、『中央公論』第四六巻第七号、一九三二年七月一日。
- (17) 「地に墜ちた無冠の帝王」、『潮』一九六三年一月、所収。
- (18) 「新聞」、前出『選集』第四卷、所収、二六ページ。
- (19) 前掲書、一八ページ。
- (20) 「造化精妙」、『上野理一伝』、朝日新聞社、一九五九年、前出『選集』第四卷、三七〇ページ。
- (21) 「ジャーナリズムの本質と変質」、『日本評論』第一〇巻第一二号、一九三五年二月一日。

（本稿は平成五年度文部省科学研究費補助金一般研究A「戦中戦後リベラリズムの継承と発展」による研究成果の一部である）